

○研修会の様子（令和3年10月1日（金）14：00－16：30 於：県庁1001会議室）
◆シンポジウム（参加者135名）

テーマ 不登校児童生徒への連携支援の実際と課題
～将来の社会的な自立に向けて～

コメンテーター兼コーディネーター
花輪 敏男 氏
FR教育臨床研究所 所長（天童市）

話題提供①

荒木 秀和 氏
NPO法人プチュナイテッドアスリートクラブ
フリースクールあにまる 事務局長（山形市）

【要旨】

- ・現在、小学生通所利用7名、訪問サポート11名。中学生通所利用10名、訪問サポート19名。お母さんサポートを6家庭で行っている。見学や相談が増加している。
- ・不登校児童生徒と接していて、児童生徒は普通の学校生活にあこがれている。できれば学校復帰をしたいという思いがある。
- ・児童生徒にはマンツーマンで対応し、時間をかけてコミュニケーションをとっている。コミュニケーションがとれない児童生徒はいない。時間をかけるとちゃんと会話ができるようになる。
- ・学校との連携のポイントは、役割を分担することである。本人の思いに寄り添うとともに、保護者とも学校と連動して支援を行うことを確認し、支援を行うようにしている。
- ・利用児童生徒が在籍する学校側からは管理職や学年主任、担任、養護教諭などが施設に訪問し、児童生徒の様子を参観いただき、情報を共有していただけるようになった。
- ・高校進学については全日制・通信制とさまざまであるが100%であった。
- ・家庭・学校・フリースクールの3者が同じ目的で同じ方向に進むよう連携すること、そして本人の意思や気持ちに対応することが必要不可欠である。



【花輪氏のコメント】

- ・私の経験からも不登校の児童生徒は「学校に行きたい」という思いがあり、アンビバレンツな心理状態で葛藤している。
- ・不登校の児童生徒の状況は例えると、ガソリンの少ない自動車である。故障して動けないのではない、ガソリンが入っていない。解決のためにはガソリンを入れること、そして、条件として学校と道路がつながっていることである。
- ・ガソリンが入ると児童生徒は学校に向かうようになる。そのタイミングで支援者はちゃんと押してあげることが大切。学校との道路があれば、児童生徒は学校にたどり着くことができる。
- ・適応教室やフリースクールでやるべきことはガソリンを入れること。
- ・ガソリンが入ってくると、生活のリズムは整ってくる。
- ・発達障がいや二次障害としての不登校の支援にあたっては、特別な技術が必要である。

話題提供②

伊藤 洋子 氏

山形大学地域教育文化学部教職研究総合センター 客員准教授
山形県公認心理師・臨床心理士協会 会長（山形市）

【要旨】

- ・平成8年からSCとして勤務しているが、初期は何をする人だろうと学校から警戒されたが今はすっかり根付いてきた。
 - ・不登校児童生徒のネット依存は、つらい現実から逃避したい表われであると感じている。
 - ・不登校の要因は自意識の高まる思春期と重なる時期に、本人の性格、学業の不振、いじめの問題、家庭環境、SNSをはじめとした社会的な環境、友達関係の変化、発達障がい等が複合的に絡んでいるので見立てをきちんとしないと対応が難しい。
 - ・カウンセリングの基本は、クライアントとなる児童生徒や保護者と気持ちに共感しながら安心感を取り戻すことである。
- ・大切なのは、どうしてこのような状態となっているのかを理解するアセスメントを丁寧に行うこと。
- ・不登校については、「ゆっくり休ませた方がいい時期」と「登校刺激を積極的に与えた方がいい時期」があり、カウンセラーはそのタイミングを見極め、関係者に助言し、連携をする。押し上げるタイミングは、しっかりと関わって本人の様子を見ていればわかる。表情が明るくなってきた等、明らかにエネルギーがたまってきた感じのときがそのチャンスである。
- ・SCは守秘義務があるので、本人や保護者との相談内容については、学校等の関係者と連携して支援を行ってよいか理解を確認して情報共有を行っている。
- ・SCの強みはしっかりと時間をとって相談を受ける機会をつくれること、成育歴等の情報を聴取できることであり、得た情報をもとに関係者へのアドバイスに生かすことができる。
- ・医療との連携にあたっては、SCは情報提供書を作成し、医師につなぐことができるので活用いただきたい。情報提供書を持参すると、医師から高い確率で返事をいただける。医師からの診断書の内容についても医学用語等SCに聞いていただくとうよい。



【花輪氏のコメント】

- ・SCをはじめとした専門家の取組みは専門家ではできない。例えば、学校現場では成育歴を知ってできることはない。だからこそ専門家との連携が必要である。医療も同じ。
- ・しかし、教師には「お任せ体質」という問題がある。「不登校だからSCへ任せる」「発達障がいだから医療へ任せる」というように任せっぱなしにしない。教師はその役割を生かして連携をしていくことが大切である。
- ・登校へとつなげていくには、学校と道路がつながっていること、そして技術がないといけない。技術とは例えば、「出席をとったら、すぐに保健室に戻りなさい。」「調子がいいからといって教室に残ってはいけません。」というように、スモールステップで本人が楽にやれるようにして自信を持たせ、その自信を新たなエネルギーとする。つまり、走行しながら新たなエネルギーを得るハイブリッドカーのようにしていく。
- ・家庭と学校との道路をつなぐためには、先生との信頼関係が大切である。



全体を通して

○教育委員会として連携を後押しするサポートについて

【伊藤氏】

- ・学校と保護者との方向性が合わなくなったときに、上手に仲介したり、第三者的な目線で情報提供や橋渡ししたりする役割ではないかと考える。

【荒木氏】

- ・持っている情報を最大限に生かして発信してほしい。ここにどんなフリースクールがあるのか、そこではどんなケースの支援ができてきているのかなど、この度作成したリーフレットのように、学校を通して必要とする方々に情報が届くようなシステムづくりをしていただけるとありがたい。

【花輪氏】

- ・先ほど話した「お任せ体質」にならないように、学校が主体性を持って不登校児童生徒の支援を行えるようにすること。
- ・フリースクールがどんな考えでどのような支援をしているのかについて情報をつかみ、発信すること。
- ・県内にはいろいろな資源があるので、互いに役割分担をしっかりと連携をしていくことが大事。

○センター的な機能としての特別支援学校のかかわり方について

【花輪氏】

- ・特別支援学校は業務としてセンター的機能を果たさなければならない。大いに活用すべきである。
- ・特別支援学校の教員を講師に招くなど日常的に活用する方法がよいと思う。
- ・高校については地域で担当学校の割り当てが決まっている。

○小学校から中学校、中学校から高等学校の学校間の接続について

【伊藤氏】

- ・申し送りを丁寧にしていただきたい。こんな困り感があって、どのようにかかわって、どう変容したかなどを記してほしい。
- ・中学校入学前の春休みに、保護者同伴で担任や主任、養教の先生と学校を回ってほしい。保健室や別室登校の教室なども話を前もってしていただくとよい。そうすると児童生徒の安心感につながる。
- ・小学校にSCの配置はないが、同じ中学校区であれば相談を受けることができるので、小学校の内からSCとつながっていただけるとよい。

【花輪氏】

- ・進学した際に、不登校だった児童生徒ががんばりすぎる、過剰適応の状態になることがある。ブレーキをかけて、少しずつ在校時間を増やすような対応を考えなければならないと考える。
- ・現在は不登校だから高校進学に不利になるということはない。しかし、中学校からの申し送りは丁寧にしておくことが必要である。



◆参加者の声

- 思春期に転校の決断や一歩前に踏み出す勇氣は、普通の家庭でも難しい。不登校を持つ親子さんの心情は計り知れないし、長い時間をかけて向き合いながら頑張っているのだと思います。安心した環境で生活して自立するために、フリースクールあにまるさんは心強いです。学校・家庭・行政のパイプラインの強化はすごく大事だと思いました。(民間支援団体支援者)
- 改めて「連携」の大切さ、「役割」の認識と分担の重要性を具体的に理解できたことは、大変貴重な時間でした。伊藤先生や荒木先生の長年の努力と具体的な取組みの一部を生々の声で知れたことは大きかったです。そして、熱い想いを語ってくださった花輪先生のリアルな実情のお話と、「ガソリンを入れることが必要！」という例えがわかりやすかったです。(カウンセラー)
- 学校にいと限界を感じることも多かったり、それでも何とかしないと、という気持ちになったりもしますが、それぞれの立場で、役割で同じ方向に向かって進んでいけると思えば気が楽になりました。普段はずっと学校という狭い世界にいるので世界がひろがりました。またこうして様々な立場の方の話を聞かせていただける機会があればうれしいです。(小学校教員)
- 不登校児童生徒の支援の実際として、フリースクールの生の声を聴くことができ、とてもよい勉強になりました。まだまだ存在と支援内容を知らないのて、このような機会がもっとあればよいと思います。本校に寄せられる巡回相談の内容が発達障がい二次障がいであろうと思われる事例が多くなってきているので、もっと民間の支援団体とつながらなくてはならないと感じるとともに、具体的対処法をもっとお聞きしたかったです。(特別支援学校教員)